

【 復活讃詞 第7調 】

ハリスト スか み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て しを
 神 爾 十 字 架 死

ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く えんをひ
 滅 盗 賊 た 爲 樂 園 開

ら き 、 け い こ う ぢよのか な し み を な ぐ さ
 攜 香 女 悲 慰

め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か 界
 使 徒 爾 復 活 世 界

い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え
 大 憐 賜 傳

さ せ た ま え り 。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世

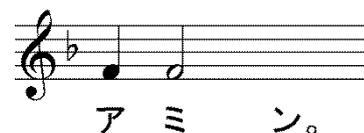
し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ち ゆ う
 使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て しん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛
 にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光
 しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亜使徒主教 聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 及
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全 世界 爲 生 命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給。

司祭) (黙誦： せい かみ せいじゃ うち いこ せいさん こえ もつ かしょう
 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう
 讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

^{けだしわ かみ なんぢ せい われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}
 司祭) 蓋 我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

しゅ は その たみにちからをたま い、しゅ は
 主 其 民 力 賜 主
 その たみにへいあんのふくをく だ
 其 民 平 安 福 降 だ
 さ さん。

誦經) 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

しゅ は その たみに ちから を たま い、 しゅ は
主 其 民 力 賜 い、 主

その たみに へい あんの ふ く を く だ
其 民 平 安 福 く 降 だ

さ ん。

誦經) ^{しゅ そのたみ ちから たま} 主は其民に力を賜い、

しゅ は その たみに へい あんの ふ く を く 降
主 其 民 平 安 福 く 降

だ さ ん。

【 使徒經 (アポストロス) 181 端 コリント後書 6 章 1~10 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ こうしょ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい われら どうろうしや なんぢら もと かみ おんちよう いだづら う なか けだし} 兄弟よ、我等は同労者として爾等に求む、神の恩寵を徒に受くる勿れ。蓋

^い 言えるあり、^い 納るべき時に我爾に^き 聽き、^{すくい ひ なんぢ たす} 救の日に爾を助けたりと。^{み いま よ い} 視よ、今は嘉く納る

^{とき み いま すくい ひ} べき時、視よ、今は救の日なり。^{われらなにごと おい つまづき ひと お わ つとめ そしり} 我等何事に於ても躓を人に置かず、我が職の謗

^う を受けざらん爲なり。^{ため われらおよそ こと おい おのれ かみ えきしや あらわ すなわちおお にんたい} 我等凡の事に於て己を神の役者と顯す、即多くの忍耐

^{かんなん きゅうぼう こんく ぼくけい きんごく そうらん きんろう けいせい きんしょく} に、患難に、窮乏に、困苦に、扑刑に、禁獄に、争亂に、勤勞に、儆醒に、禁食

^{けつじょう ちしき ごうにん じんじ せいしん いつわり あい しんじつ ことば かみ} に、潔淨に、知識に、恒忍に、仁慈に、聖神に、偽なき愛に、眞實の言に、神

^{ちから おい さゆう て ぎ ぶぐ もつ そんないおよ ちじよく あくひょうおよ れいぶん} の能に於てし、左右の手に義の武具を以てし、尊榮及び耻辱に、惡評及び令聞に

^{おい あざむ もの に まこと し し し} 於てす、欺く者に似たれども、眞なり、知られざるに似たれども、知られ、死したるに似た

れども、^{み い}視よ、^{ぼつ う に}生けるなり、^{し わた}罰を受くるに似たれども、^{うれ に}死に付されず、^{つね}憂うるに似たれども、^{よるこ まづ に}常に喜び、^{おお もの と あ に}貧しきに似たれども、^あ多くの者を富ませ、^あ有るなきに似たれども、有らざるなし。

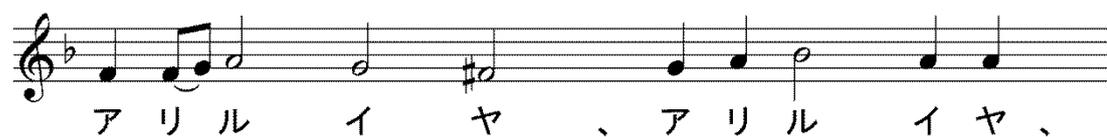
(比較用 口語訳) わたしたちはまた、神と共に働く者として、あなたがたに勧める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。神はこう言われる、「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞き入れ、救の日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。この務がそしりを招かないために、わたしたちはどんな事にも、人につまずきを与えないようにし、かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を人々にあらわしている。すなわち、極度の忍苦にも、患難にも、危機にも、行き詰まりにも、むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも、真実と知識と寛容と、慈愛と聖霊と偽りのない愛と、真理の言葉と神の力とにより、左右に持っている義の武器により、ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている。わたしたちは、人を惑わしているようであるが、しかも真実であり、人に知られていないようであるが、認められ、死にかかっているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず、悲しんでいるようであるが、常に喜んでおり、貧しいようであるが、多くの人を富ませ、何も持たないようであるが、すべての物を持っている。

司祭) ^{なんぢ へいあん}爾に平安、

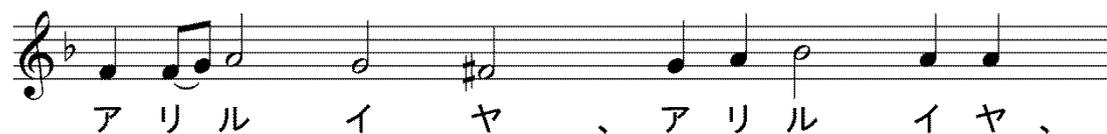
誦經) ^{なんぢ しん}爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) ^{えいち}睿智、



誦經) ^{しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた び かな}至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌うは美なる哉、



誦經) ^{なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな}爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、



司祭) (黙誦：^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我
^{しねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく}が思念の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福た
^{いましめ おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ}る誠を畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾
^{よろこ ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし}の喜ぶ所を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハ
^{かみ なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん}リストス神よ、爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の
^{ちち しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、
 アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書17端 5章1~11節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とき みづうみ はま た ふたつ ふね みづうみ}謹みて聴くべし、彼の時イイス、ゲンニサレトの湖の濱に立ちて、二の舟の湖
^{あ み ぎよしゃ ふね はな あみ あら かれ ぞく ひとつ ふね のぼ}に在るを見たり、漁者は舟を離れて網を洗えり。彼はシモンに屬する一の舟に登りて、

すこ きし はな こ ざ ふね たみ おし かた おわ い
 少しく岸より離れんことを請い、坐して舟より民を教えたり。語り竟りて、シモンに謂え
 り、深き處に移り、網を下して、漁せよ。シモン對えて曰えり、夫子よ、我終夜
 ろう うとところ しか なんぢ ことば よ われあみ おろ すで これ おこな
 勞して、得る所なかりき、然れども爾の言に依りて、我網を下さん。既に之を行
 いて、魚を圍めること甚多く、網裂くるに至れり。乃他の舟に在る侶を招きて、來
 り助けしむるに、彼等來りて、魚二の舟に切ちて、幾ど沈まんとせり。シモンペトル之
 を見て、イイススの膝下に伏して曰えり、主よ、我を離れよ、我罪人なればなり。蓋彼
 およ かれ とも あ もの みなすなど うお ため はなはだおどろ とも
 及び彼と借に在りし者は、皆漁りたる魚の爲に甚驚けり、シモンの侶たりしぜウ
 エデイの子イアコフ及びイオアンも亦然り。イイススシモンに謂えり、懼るる勿れ、今より
 のちなんぢひと すなど かれらふね きし ひ いつさい す かれ したが
 後爾人を漁らん。彼等舟を岸に曳き、一切を捨てて、彼に従えり。

(比較用 口語訳) イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そうの小舟が寄せてあるのを
 ごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そうはシモンの舟であったが、イ
 エスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群衆にお
 教えになった。話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。
 シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。しかし、
 お言葉ですから、網をおろしてみましよう」。そしてそのとおりにしたところ、おびたしい魚の群れ
 がはいて、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をし
 たので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそうになった。これを見て
 シモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたしから離れてください。わた
 しは罪深い者です」。彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびたしいのに驚いたからである。
 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。すると、イエスがシモンに言わ
 れた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるのだ」。そこで彼らは舟を陸に引き
 上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸